

平成二十九年四月、五月の收穫（坤）

土屋 博

一一「明治大正昭和文學講話」高須芳次郎著

（新潮社、昭和八年刊、定價壹圓九拾錢）五二七頁、二段組、古書價格三百圓也。

大町桂月の評價は低し。曰く、桂月は一時樗牛と並稱せられたるも、實質上より云へば、評論家としての桂月は、遙かに樗牛に劣り、單なる自由健筆家に過ぎず、と。

一二「旋風裡の歐米」岡田忠彦著

（帝國書院、昭和十一年刊、定價壹圓五拾錢）本文四〇一頁、古書價格三百圓也。

岡田忠彦は内務官僚出身の政治家。「ルーズヴェルト大統領の印象」より、岡田『私は貴國の大統領にお目に懸るのはこれで五人目也。十五年前スタンフォード大學にてフーヴァー夫妻に會ひ、ニユーヘヴンにてタフト、知事室にてクーリッジ、ウイルソンは病痾中の爲秘書を通じ寫眞を贈らる』、大統領『私の母方の祖父は茶の商賣人で、嘗て上海に住んでゐて、夏冬は屢^{しばしば}横濱その他の日本の地に往來し、日本はルーズベルト家にとつては親代々馴染みの深い國也』。岡田『健康保持策如何』、大統領『ドン・ウォリー、すなはち物に屈託せぬこと。また、自分は足が不自由なれば、毎日必ず一回はプールに於いて水泳を爲し、然る後身體を摩擦す。又一週間の半分は自分の楽しみに時間を使ひ、二階には映畫などのやれる設備もしてある』。「ゲッベルス氏」より、ゲッベルス氏『貴下が往年我が國に來たときと今日とを比較すれば、其の間如何なる相違ありや』、岡田『獨逸國內の變化したることと整頓してゐることには驚けり』。

一三「現代名士逸話隨筆」増田義一著

（實業之日本社、昭和十一年刊、定價壹圓也、古書價格二百五十圓也。

増田義一は實業之日本社長。啓蒙著作多數あり。

たとへば澁澤榮一の大往生につきては、以下の挿話を紹介す。「薨去の十二日前すなはち十月二十九日に近親の者を枕頭に集めて、陶淵明の歸去來の詩を低聲で全部暗誦して聞かせ、自分の心境は之を出でないと語られた」と。

一四「櫻史」山田孝雄著

（櫻書房、昭和十六年刊、定價金五圓）四二五頁、古書價格四千圓也。函入。

はしがきに、「櫻花はわが國民の性情の權化なり。・・・敷島の大和心を朝日に匂ふ山櫻にたとふるを國民がげにもとうなづくは何によりて然るか。」とあり。初版のみ豪華本にて、表紙・口繪は鳥の子紙、本文用紙は福井産の仙花紙なり。

一五「吉田松陰選集」武田勘治編

（讀書新報社、昭和十七年刊、定價二圓五十錢）四二六頁、古書價格百圓也。

緒言によれば、云はば松陰自らの文を用ゐて松陰自傳を代編する積りにて編輯したる由。

目次は、一 踏海失敗篇、二 野山獄篇、三 幽室篇、四 松下村塾篇、五 最期篇、六 著述篇、年譜なり。たとへば、野山獄讀書記より、在獄中の讀破冊數、正月三十冊、二月四十四冊、三月四十八冊、四月四十九冊といった具合。

一六「定本 國民座右銘」日本文學報國會編

（朝日新聞社、昭和十九年刊、定價二圓）四六一頁、古書價格三百圓也。

一月一日は「大日本は神國なり」(北畠親房)、解説の山田孝雄教授曰く、これは神皇正統記開卷第一の句、我が神聖なる國體をただ一句にて喝破したるものとして古來有名なり、と。

一七「與謝野晶子書簡集」岩野喜久代編輯

(大東出版社、昭和二十三年刊、定價金百三十圓) 三五二頁、古書價格三百圓也。

明治四十一年より昭和十五年までの書簡を收録。解説によれば、少女時代父君の藏書は庫に充ち、晶子は手當り次第に抽き出して耽讀出來たる由。(實兄鳳秀太郎東京帝國大學工學部教授の言)

たとへば、明治四十五年五月十四日の書簡。「シベリアにて。やうやくわれも汽車になれまあり候。もう五日もすればパリへつくの候へど、心は來年の春の神戸のみが待ち遠しく候」と。

一八「原典による世界文学史」中野好夫、渡邊一夫、相良守峯、中島健藏監修

(河出書房、昭和二十六年刊、定價六五〇圓) 七五八頁、二段組、古書價格百圓也。

本書は、世界文學の原典日本譯の中より各々の作家、時代思潮などの特筆を窺ふに足る部分を抜萃編集したるものなり。たとへば、シェイクスピアにつきては、ヴェニスの商人「慈悲の美德」、ヘンリー四世より「名譽は墓石の御紋章」、ハムレットより「生きるか死ぬか、それが問題だ」、オセロより「オセロの嘆き」、リア王より「リア王と道化」及び「狂亂のリア王」、あらしより「人生は夢」を七頁に亘り二段組にて收録す。また、ゲーテにつきては、若きウェルテルの悩みより「十二月六日」、ファウストより幾つかの場面、プロメーテイスの詩などを含む六頁なり。

一九「原典による日本文學史」麻生磯次、池田龜鑑、市古貞次、久松潜一、守隨憲治、吉田精一監修
(河出書房、昭和二十七年刊、定價六五〇圓) 七二八頁、二段組、古書價格八一〇圓也。「原典による世界文學史」の姊妹篇なり。たとへば、古事記よりは、「スサノオの命、倭建ノ命」、日本書紀よりは「仁徳天皇の徳政」風土記よりは、「國引きの唱へ言、筑波の岳」を收録す。平家物語よりは、「祇園精舎、坂落」。

(平成二十九年八月十日受附)